

オンリーワンにこだわる地域密着企業 国内で生産されている ピラミッド形テンションリールでは 80%以上のシェアを誇る

ブランドメーカーになれば価値が変わる

植田製作所は、家電や飲料缶、自動車のボディ、住宅やビルなどに使用される圧延された鋼板を巻き取る機械“テンションリール”と、巻き戻す機械“ペイオフリール”に強く、特に国内で生産されているピラミッド形テンションリールでは80%以上のシェアを誇る「オンリーワン企業」である。奇遇にも、4代目となる現社長の濱小路兼生氏は2006年の社長就任時からオンリーワン企業を強く意識していたと言う。植田製作所の採用サイトを見ると濱小路社長の言葉として次のように綴られている。「弊社の主力商品であるテンションリールやリールドラムは高い製造技術を強みとしています。今後も技術と品質の向上に努め、国内はもとより海外からの取引先からも信頼を確立し、製品のブランド力を構築することにより、リールとリールドラムの“オンリーワン”を目指します」。

興味深いのは、既に高い国内シェアを持っているにも係らず、ブランド力の構築によってオンリーワンを目指そうとしていることである。ここには、他社にない、他社に追随を許さない技術・技能・製造・サービスへのあくなき追求心が存在する。濱小路社長は言う「ブランドメーカーになれば価値が変わる」と。

では、植田製作所はどのようにしてオンリーワン企業の地位を確立してきたのだろうか。その経緯を見ていこう。

歯車から減速機、そしてテンションリールへ

植田製作所の前身である植田歯輪工場は1946年に当時の若松市（現在の北九州市若松区）に設立された。歯輪とは歯車のことである。当時、若松には日立製作所若松工場があり、その要請もあり大阪から移転し設立したのである。

最初の転機は1950年。この年に歯車を使った減速機を製作。ここから歯車の高性能化と装置の開発を進め、当時の八幡製鉄所（現・日本製鉄八幡製鉄所）等への納入を実現し、業績を拡大させていった。そして、減速機などの歯車以外のウエイトが大きくなったことから、1959年

に現在の植田製作所に社名変更した。

次の転機は1985年。この年にプラザ合意によって急激に円高が進む。輸出依存度が高かった日本の製造業は苦境に陥ることとなった。いわゆる円高不況である。そこで大手製造業はコスト削減のため、内製から下請け企業への外注を進めた。その結果、植田製作所には大手製造業からテンションリールの引き合いがきたのである。テンションリールは減速機とリールドラムから構成されており、引き合いはこれまでの植田製作所の減速機が評価された結果であった。そして、その後にはリールドラムも製作することになる。

周知のように、円高不況の際に日本の製造業は国内拠点の縮小・再編を余儀なくされ、その影響は中小の下請け企業に多大な影響を及ぼし、倒産する企業も続出した。しかし、植田製作所は大手製造業が製作を縮小する中で、その受け皿となることで飛躍を遂げたのである。まさにピンチをチャンスにしたのである。



転炉傾動装置用減速機製造風景

ピラミッド形高性能テンションドラム国内随一のメーカー

その後も植田製作所は大手製造業の協力会社からパートナーへと確実に成長して、テンションリールやリールドラムのメーカーとしての地位を確立する。なかでも、60トンの高圧延張力に対応できる“ピラミッド形高性能テンションドラム”においては国内随一のメーカーとなっている。

技術・技能に加えて、植田製作所の強みとなっているのが、中小企業でありながら設計から加工・組立・検査までの工程を一貫して行なえることである。これによって各工程の社員がイメージと認識を共有しながらモノづくりに取り組んでいるのである。その結果、納期短縮・品質向上を実現しているのである。



代表取締役社長
濱小路 兼生 氏
1943年 北九州市 若松区出身
若松生まれの若松育ち。
1968年に入社。2006年から社長に就任。入社してから一貫して営業畑を歩きその感覚で社員を引っ張り、陣頭指揮を取っている。社員・お客様のお陰で、テンションリールの分野では世界でもトップクラスへと成長できたと思っている。今後もお客様の為に、お客様の満足を求めて、ニーズを先取りし、誠実に技術の研鑽に励む。そしてその製品をもって地域及び社会に貢献することを目指している。

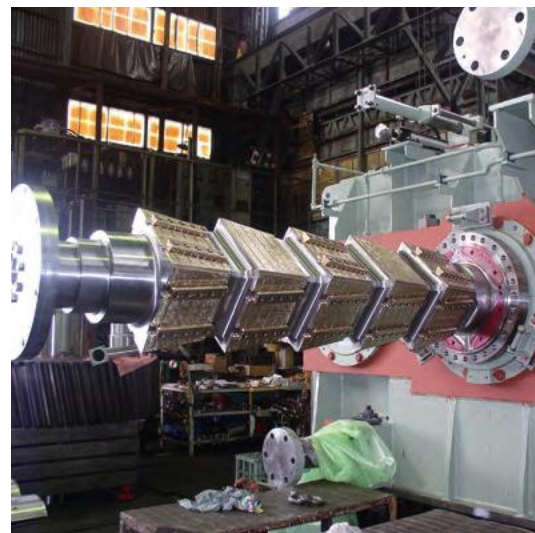
サービス製造業としての飛躍も

実は、21世紀に入ってからのもひとつの転機があった。リーマンショックの2008年である。受注が急減したのである。オンリーワンのメーカーといえども受注がなければ業績をあげることはできない。そこを救ったのが、アフターフォローやオーバーホールへの対応である。不況だからこそ、テンションリールやリールドラムを使用する企業の間で、アフターフォローやオーバーホールのニーズが拡大したのである。植田製作所はまたもや不況時において必要とされたのである。

植田製作所が成長・存続できたのは、一貫した工程を持った技術・技能の高いメーカーだからである。現在、これらの特徴を活かし、植田製作所が係っていないテンションリールやリールドラムのアフターフォローについても受注が増加している。きっと植田製作所は“サービス製造業”としての地位も固めていくのであろう。



テンションリール用ギアボックスユニット



株式会社 植田製作所

テンションリール（鋼板巻取機）およびリールドラム等の製造

企業概要		DATA
企業名	株式会社 植田製作所	
代表者	濱小路 兼生	
所在地	北九州市若松区北湊町4-1	
TEL	093-761-1431	
FAX	093-751-0233	
資本金	4,700万円	
創業	1946年	
従業員数	75名	
事業内容	オーダーメイドによる、テンションリール、ペイオフリール、リールドラム、ギア、減速機等の設計・製造	
URL	http://www.ued-mfg.co.jp/	

経営者と触れて

濱小路社長は「植田製作所が若松にあることをアピールしたい」と語ってくれた。それだけ若松に熱い思いをもたれている。実際、濱小路社長は若松区自治連合会副会長なども兼任されている。また、驚いたことに植田製作所の社員75名のうち42名は若松区在住とのこと。
一貫した工程を支えるチームワークには社長を筆頭とした社員全体の若松に対する誇りや思いがあるのではと感じた。